

京芸の「描き場」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 京都市立芸術大学美術学部 公開日: 2023-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三橋, 卓, 奥村, 美佳 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15014/0002000039

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0
International License.



京芸の「描き場」

Sketching locations around Kyoto City University of Arts

Taku Mitsuhashi, Mika Okumura 三橋 卓、奥村 美佳

はじめに

京都芸大周辺の地域（沓掛、大原野、旧中山道など）は本校の学生にとっては恰好の「描き場」である。また、移転当時と比べると、大きくその姿は変化したが、刻々と変化していく環境も含め、自然観察を基盤とした創造活動という日本画専攻の教育をずっと下支えしてきた大切な場でもある。本稿では、2022年度に行った、主に沓掛キャンパスへ移転してからの京都芸大周辺地域の写生を収集し、京都芸大の学生（教員）たちが行ってきた写生という名のフィールドワークの足跡を辿ることで、京都芸大沓掛キャンパスの「描き場」、そして大学移転後の新たな「描き場」について考察する機会としたい。

概要

奥村美佳、三橋卓、大学院生の計9名で考察した。そして、収集した写生及び現役の学生の写生を展示した展覧会の開催を目指した。主な調査研究の要素は以下の通りである。

- ・現京都芸大（沓掛キャンパス）周辺のフィールドワーク
- ・新京都芸大（崇仁キャンパス）周辺のフィールドワーク
- ・卒業生の写生収集
- ・写生データ整理
- ・展覧会の準備

(1) 現京都芸大（沓掛キャンパス）周辺のフィールドワーク

4月12日に、奥村・三橋の担当大学院生を集め、本調査の概要及びスケジュールを共有した。その後、京都芸大から千丈天満宮までの道のりのフィールドワークを行った。4月20日に再びフィールドワークを行い、新林

池公園の写生を行なった。5月18日、京都芸大校内の写生も、過去から現在まで多くの学生が行なっていることから、改めて校内のフィールドワークを行なった。その後、各自で散策や写生等のフィールドワークを行なった。



(2) 新京都芸大（崇仁キャンパス）周辺のフィールドワーク

6月14日に崇仁キャンパス周辺のフィールドワークを予定していたが、雨天の為、7月5日に延期とした。その際に、工事中新校舎から賀茂川河川敷、川端通り、七条通りを散策及び簡単な写生を行なった。その後、各自で散策や写生等のフィールドワークを行なった。



(3) 卒業生の写生収集

沓掛校舎へ移転してからの卒業生を対象に、学生時代に描かれた沓掛校舎周辺の写生を収集した。

4月26日に、三橋の学生時の写生を、メンバーと共に写生鑑賞、写生場所の特定や、同場所の現在の様子などをリサーチした。5月18日、森桃子氏、上坂秀明氏から大学院時の写生をお借りし、メンバーと共に写生鑑賞、写生場所の特定や、同場所の現在の様子などをリサーチした。6月14日に、高島佐句子氏から学部生、大学院生時の写生を提供頂き、メンバーと共に写生鑑賞、写生場所の特定や、同場所の現在の様子などをリサーチした。また同氏からは、今熊野校舎時代の写生もお借りすることができた。7月20日に、武部翔子氏から学部2年生時の基礎課題である地面の写生をお借りし、メンバーと共に写生鑑賞、写生場所の特定や、同場所の現在の様子などをリサーチした。11月2日に、清水豊氏から大学院生時の写生をお借りし、メンバーと共に写生鑑賞、写生場所の特定や、同場所の現在の様子などをリサーチした。12月22日に、北川咲氏から4年生時の写生をお借りし、リストに加えた。

(4) 写生のデータ整理

収集した写生をそれぞれ撮影、ナンバリングし、リスト化を行なった。(表1)

(5) 展覧会の準備

収集した写生及び本研究に関わった大学院生の沓掛・崇仁両校舎周辺の写生の展覧会を、京都芸大の大ギャラリーで2023年1月5日から8日にかけて開催するため、今回のフィールドワークで訪れた場所の地図を作成し展示した。



終わりに

今回、学生時の写生ということで、既に処分されていたり、紛失していたりと、なかなか卒業生からの収集が難しかったが、快く貸し出して下さった以下の卒業生の方々には、この場を借りて厚く御礼申し上げる。

北川咲氏

上坂秀明氏

清水豊氏

高島佐句子氏

武部翔子氏

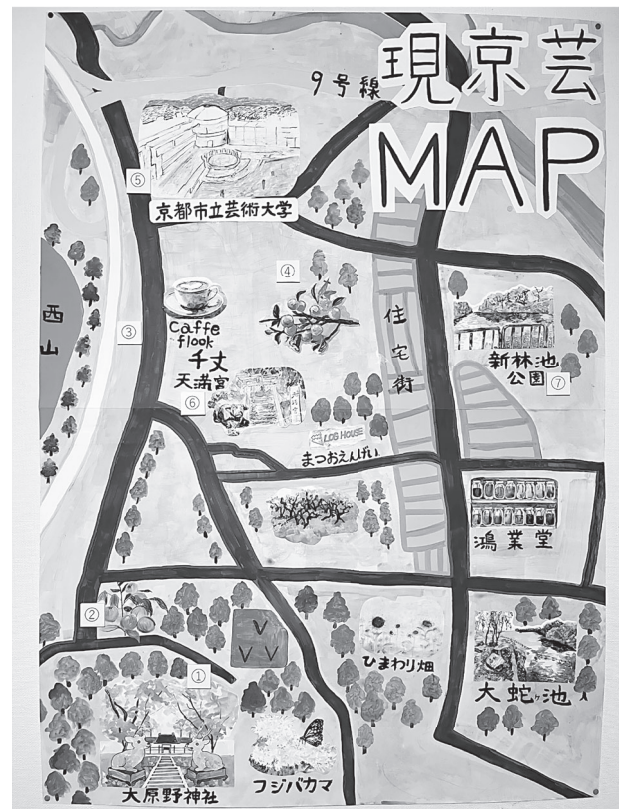
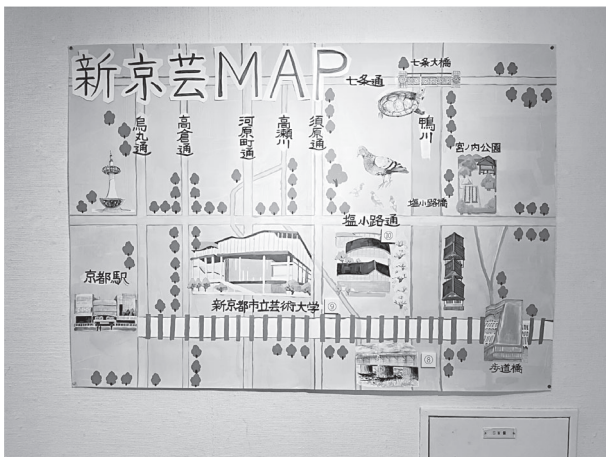
森桃子氏

刻一刻と変化する自然に身を委ね、とどまらないものに対してどのように形や色を決定し画面に載せていくのか、その葛藤がお借りした写生や作者の言葉から感じられ、筆者も共に鑑賞した学生たちにも大変刺激的なものであった。

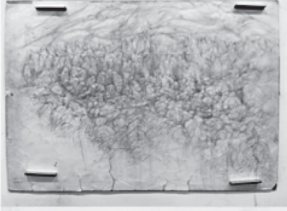
また、大学裏の西山の風景は、40年前と比べると、住宅が増え、京都縦貫道が通り、その姿は大きく変わってしまったが、それすらも新たなテーマとして、学生たちは柔軟に対応してきたことも改めて分かった。

さらに、高島氏からは、貴重な今熊野校舎時代のお話も伺うことができ、その当時の写生もお借りすることができたことは、以前の移転前後の様子を窺い知る貴重な機会であった。当時の学生たちは主に大学を拠点とし、アクセスの良い立地であったためか、比較的広域に渡って取材を行っていたという。その後、沓掛へ移転をし、当時は今よりも自然豊かであった同地では、わざわざ遠出をすることもなく、写生をする場所には困らなかったそう。

現在、大学が自然と隣り合わせにあることから、散歩がてら気軽に写生に出かけられる環境である。そんな日々が長年当たり前になり、2023年度の移転の際には、環境の変化によって、ふらっと写生に出かけることがなくなってしまうのではないかと考えていたが、実際、移転先である崇仁地域へのフィールドワークを通して、鴨川や東山など、ここ京都ならではの自然の営みがあることがわかったことも大きな成果であった。いわば、今熊野時代のようなアクセスの良さを活かした広域な取材範囲に加え、沓掛時代のような大学周辺での取材も可能になるハイブリッドな立地になるのではないかと期待しつつ、今後の崇仁地域での関わり合いの中で、新たな「描き場」を学生と共に開拓していければと思う。



(表1)

名前		タイトル	サイズ 縦×横 (mm)	作品画像
1	三橋卓	千丈天満宮の切り株 (2010)	1240*783	
2		千丈天満宮の樹木 (2010)	1080*872	
3	武部翔子	柿の木 (2010)	545*790	
4		地面 (2008)	795*1097	
5	高島佐句子	東山校舎(1979)	405*315	
6		山(1983.4)	382*540	
7		山(1984.1)	382*540	
8		山(1984.5)	390*540	

9

山（黒）(1984.5)

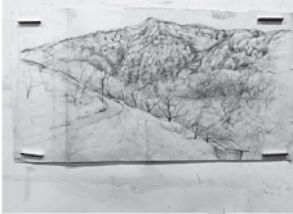
395*545



10

山(1985.4)

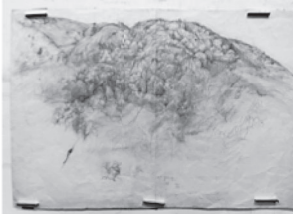
396*720



11

山（1985.5）

540*782



12

山（1983.11）

380*1080



13

山(1984.5)蛙

545*785



14

竹林(1984.5)

380*540



15

柿の木(1983.12)

550*750



16

柿の木(1983)

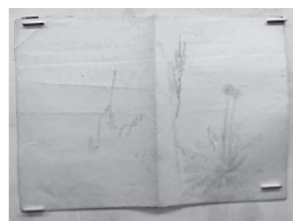
390*540



17

山(1984.5) タンポポ

545*786



18

山 (1984.5)

545*786



19 森桃子

椿(2004-2005冬)

925*1007



20

トマト(2004)

540*940



21

モクレン(2005)

395*540



22

松(2001)

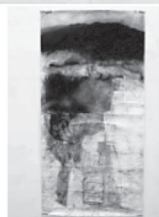
384*558



23 上坂秀明

山 (2008)

1910*968



24 清水豊

京芸の裏の田畑と山(1984.5)

625*2670



25

京芸の裏の田畑と山(1984.5)

625*2730



26 北川咲 大学裏のトタン屋根 (2018)

700*1410

